

引退した
嫌われ

S級冒険者は スローライフに浸りたいのに!

気が付いたら辺境が世界最強の村になっていました

3

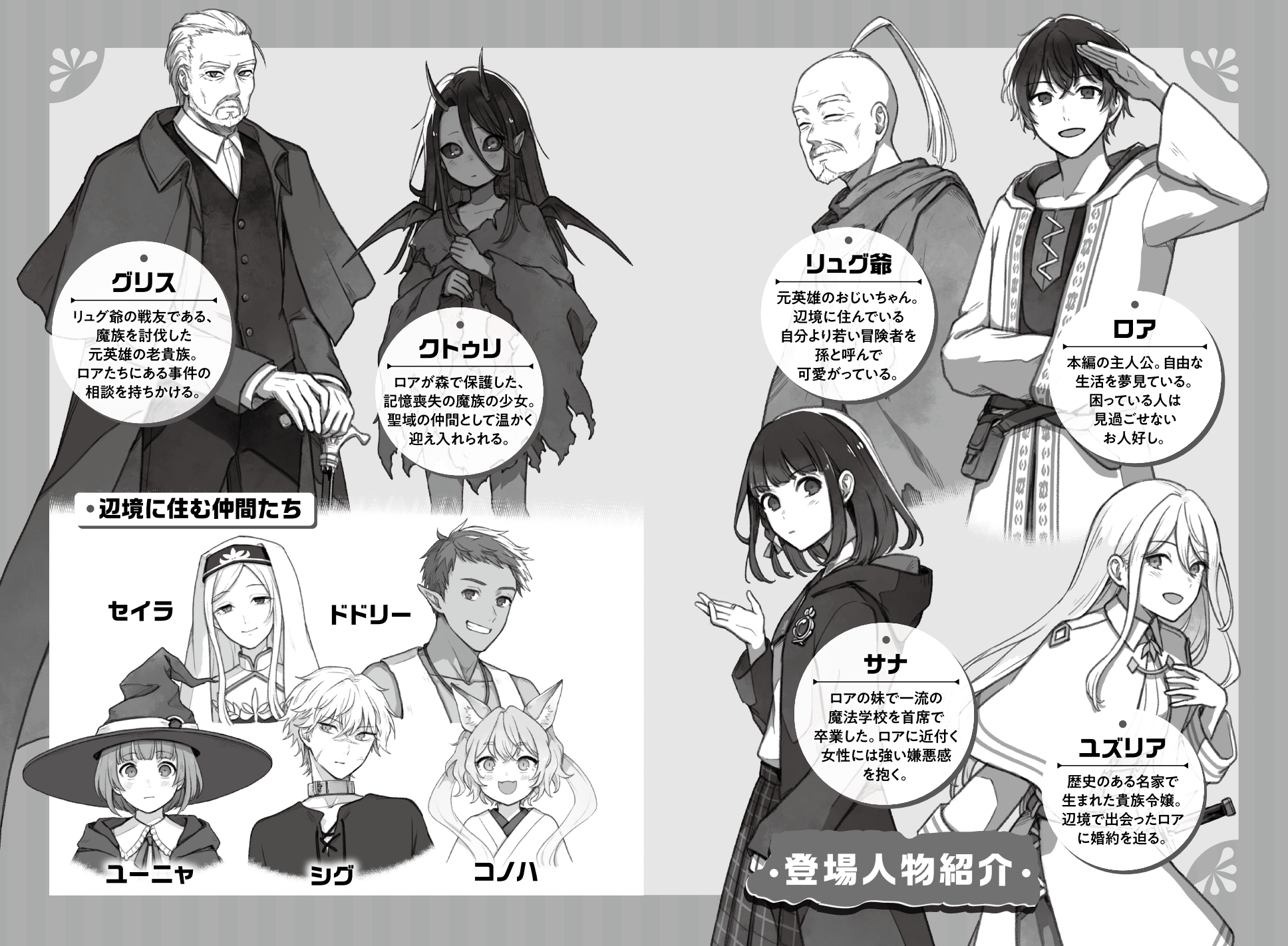
Bitansan

微炭酸

III. 紅木春



Intai shita kiraware "S"kyuu boukensya ha
SLOW LIFE ni hitaritainoni !



グリス

リュグ爺の戦友である、
魔族を討伐した
元英雄の老貴族。
ロアたちにある事件の
相談を持ちかける。

クトゥリ

ロアが森で保護した、
記憶喪失の魔族の少女。
聖域の仲間として温かく
迎え入れられる。

リュグ爺

元英雄のおじいちゃん。
辺境に住んでいる
自分より若い冒険者を
孫と呼んで
可愛がっている。

ロア

本編の主人公。自由な
生活を夢見ている。
困っている人は
見過ごせない
お人好し。

・辺境に住む仲間たち

セイラ

ドドリー

ユーニャ

シグ

コノハ

サナ

ロアの妹で一流の
魔法学校を首席で
卒業した。ロアに近づく
女性には強い嫌悪感
を抱く。

ユズリア

歴史のある名家で
生まれた貴族令嬢。
辺境で出会ったロア
に婚約を迫る。

・登場人物紹介・

第一章 魔族の少女

常人^{じんじん}が生存^{じんぐん}することが難しい人類^{じんるい}圏^{けん}の外側^{ぐわいそく}にある、魔物以外には有害な空気中に存在する物質である魔素^{まそ}が尋常^{じんじょう}ではない森——通称、魔素^{まそ}の森^{もり}。

その奥深くに存在する不思議な魔力溜まり^{まりぐみ}の泉を中心とした聖域^{せいいき}に、一つの村が存在する。冒険者の最高峰であるS級冒険者や、それに準ずる強さの者しか住んでいないおかしい集落だ。

俺——ロアもその村の住人の一人。他にもたくさんの方が聖域に住まいを持ち、互いに助け合いながら暮らしている。

最初は俺と貴族令嬢のユズリアの二人だけだったが、今では賑やかな声が絶えない村になっている。月狐族^{げつこぞく}のコノハに、俺の妹で超エリート^{ちやうえりーと}のサナ、暑苦しいエルフのドドリーとバーサーカー^{バーサーカー}神官^{しんくわん}のセイラ。そして、五十年前に魔族を討伐した英雄であるリユグ^{リユグ}爺^{じい}。

他にも最近では、俺を追いかけて後輩冒険者のユーニヤが聖域へとやってきたばかりだ。

ユーニヤは病床^{びようしやう}に伏した父親の世話があり、聖域に住むことはないと言っていた。しかし、俺とユーニヤの所属していたギルドの長の不正を暴き、ユーニヤの父親にかけられた呪いを解いたことによって、しがらみは晴れ、まふまふと聖域に住み着くことになったのだ。

さらに、ギルド長の奴隷として虐げられていた青年のシグと、怪翼鳥のゴンザレスも仲間に迎え、聖域はより強力で、変な奴が増えた。

もちろん——と言うのは不本意だが、聖域に住む連中だけが厄介ことを呼び込むわけではない。ユズリアの師匠であり、リュグ爺の弟子であるS級冒険者のミステイアが、新種の龍の討伐依頼を持ち込んだし、直近では魔族や龍に変身する最強のスライム——ニルとの激戦が起こったばかりだ。

おかげで俺は冒険者を引退したというのに、ことあるごとに強敵と戦う羽目になっている。

しかし、俺も戦いに明け暮れているだけではない。なんたって、俺の最たる目標であり、ここに住む理由は、悠々自適なスローライフ生活のためなのだから。

何もなかった聖域に広い畑をつくり、一日の疲れを癒せる温泉施設を建て、最近は嗜好品の酒づくりにまで手を広げている。

ふっふっふっ……！俺の理想の生活は、ニルとの戦いが終わったことで、ようやくスタートしたのだ！

「ロアー！そろそろ、日が暮れるわよ」

俺の名前を呼ぶ声に、鍬を振る手を止めて振り返る。

長い銀髪をふわりと風に揺らした少女——ユズリアが畑の入り口から俺に向かって手を振っていた。

ふいに俺は空を仰ぐ。作業を始めた時は高く昇っていた太陽が、いつの間にか西に大きく傾いていた。

「もうちよつとで終わるからー！」

そう伝えると、ユズリアがわざわざ靴を土で汚して俺の側までやってくる。

「ロアがこんなに熱心に働くなんて珍しいわね」

「俺を動かさない石像か何かだとでも？」

「だって、最近いつも隠居したご老人みたいにごろごろしてるじゃない。リュグ爺の方がロアよりも動いている時間が長いんじゃないかしら」

「うぐっ……返す言葉もない……」

ユズリアは持つてきた手拭きで俺の額の汗を拭き取る。少し恥ずかしかったけど、今は周りには誰もいないし、手も土まみれだ。だから、仕方ない。されるがままにしよう。

「それで、何やってたの？」

ユズリアは耕された畑を見渡し、首を傾げた。

「ニルが珍しい作物の種をくれたからさ、せっかくだから育てようかと思ってね。コノハに頼もうと思ったんだけど、あいつ最近セイラと一緒に、シグとユーニャに稽古を付けてるらしくて。だから、たまには俺が畑仕事をやるうかなって」

「ふーん。本当、ニルは見たことないものばかり私たちにくれるのね」

と、そんな話をしていれば、ちょうど話に上がったスライムのニルを抱えたサナが畑に姿を見せる。多分、ユズリアと同じく俺を呼びに来たのだろう。

「お兄^{にい}、まだやってる。リュグ爺とドドリーがお腹空いたってうるさいから、そろそろ切り上げて」

「お腹空いたって、まだ日暮れ前なんだけど……夕飯には早くないか？」

「老人は夜が早い」

サナはさらりと言い切るが、長命種^{ちやうめいしゆ}であるエルフのドドリーを老人扱いはどうなんだ……確かにリュグ爺より年上ではあるのだけど。ドドリーの場合、身体を動かすすぎて腹が減っただけなのは？

ふと、話を聞いていたニルが身体の一部を触手^{ふし}のように伸ばし、俺の手に残っていた作物の種を掴み取った。

不思議に思っていると、ニルは丸っこい身体をいくつにも分裂させる。

本当、いつ見ても目を疑うような光景だ。スライムが自らの身体を分裂させ、他の生物に姿を変えてしまうのだから。しかも、驚くことに姿だけが変わるわけではない。変身した生き物の身体能力や魔法まで使えてしまう。ニルは規格外の能力を持ったスライムなのだ。

ニルの分裂体がぐにやりと歪み^{ゆが}、その姿を二足歩行の魔物に変身させた。本体のニルが触手を伸ばして分裂体の魔物たちに指示すると、彼らは何も言わずに鍬と種を持ち、畑に散らばる。

「ええ……」

俺がそれを見て哑然^{だねん}としていると、ユズリアも続く。

「魔物が種まきしてる……」

当のニルは俺たちを見上げるように身体を傾け、満足げにその場で弾んでみせる。

結局、残っていた種まきが、ニルのおかげでももの数分で終わってしまった。戦闘だけじゃなく、日常的な作業の効率まで化物級だなんて聞いてないんだが。

その後、ニルを連れて一度帰宅すると、やけに騒々しい面子^{メンツ}が勢ぞろいしていた。玄関前で身体を丸めていたゴンザレスが、俺たちに気が付いて愉快な鳴き声と共に大きな翼を広げてバタバタとその場で仰ぐ。嬉しいのは分かるが、ゴンザレスは本来A級相当の魔物。翼を羽ばたかせるだけでも、吹き飛ばされてしまいそうな風圧だ。

そして、家に入れば、なぜか人の家で高笑いをしながら腕立て伏せをする筋肉ダルマのドドリーが真っ先に目に入る。頼むから、その額に浮かべた汗を床には垂らさないでほしい。

続いて、ティーカップを湯呑のように両手で持ち、茶を啜^{すす}るリュグ爺。いつも思うけど、そのティーカップの持ち方だと絶対に熱いよね？

「孫たちや、夕餉^{ゆうけ}はまだかの？」

「うむ！俺の筋肉も腹が減ったと言っている！」

二人の催促^{さうそく}に重いため息が零^{はな}れる。

「筋肉に腹はないぞ……腹に筋肉があるんだ。あと、どうして毎回、俺たちの家で飯を食うんだよ」

いや、飯をつくるのは俺じゃなくてユズリアとサナなんだけだね？ でも、二人とも文句の一つも言わないからさ、俺が言わないと。いつもなら俺もとやかく言えないけど、今日は違う。俺は立派に労働してきた後だからな！ 珍しく！

すると、リュグ爺はわざとらしく背を丸め、目尻をしゅんと下げる。

「孫のつくる料理を食べんと、寿命が縮みちぢそうな気がするのじゃ」

「そんなわけあるか」

思わず突っ込みが口から零れる。

「うむ！ 兄妹がつくつてくれないと、筋トレに夢中になった俺の代わりに、セイラが飯をつくりかねん！」

「そんなわけあ……るか。あるな……うん。いいよ、食べていけよ……」

セイラの殺人級の料理で、ドドリーがやられるだけなら構わないが、おすそ分けなんて言われて俺たちに飛び火でもしたら大変だ。

「今から支度だから、ご飯はまだ時間かかるわよ？」

前掛けエプロンを着けながら、ユズリアとサナが調理場キッチンに向かう。

いいなあ、この光景。おっと、最近おじさんみたいな感想が浮かびがちだな。まだ二十代前半な

のに、どうして……

「うむ！ ちょうど日課の腕立て伏せ二千回が終わったぞ。俺も手伝おう！」

上裸のドドリーが前掛けを着けるが、ごりつごりな身体で、前掛けがはち切れそうだ。

「ドドリーのそれはいらんなあ」

「ふむ、いらんのお」

虚しくもリュグ爺と感想が被ってしまった。

「今、セイラたちがお風呂の用意をしてくれてるから、先にそっち」

サナに促され、俺たちは外に追い出される。もちろん、汗だらけのドドリーも一緒に。俺も土まみれだし、ありがたく先に温泉をいただくとしよう。

男三人、それと一匹のスライムと共に温泉へと向かうと、ちょうどセイラとユーニヤ、コノハの三人が出てきた。三人とも湯上りのようで、濡れた髪に夕照せきしやうがきらきらと反射している。

「あつ、ロア先輩！ お先に入らせていただきました」

ユーニヤが火照ほてった顔で俺たちを見上げる。修行してきた後ということもあってか、ちよつぱり疲れているようだった。

「三人とも温泉の準備ありがとうな。シグはまだ修行の続きをしているのか？」

「いえ、シグさんも同じタイミングで男湯に向かわれたのですが、まだ出てきていないようですね。いつもお早いイメージがあるんですが」

セイラが男湯の入り口を振り返り、小首を傾げる。その横で、どうしてかコノハが苦笑いを浮かべていた。

「どうしたんだ、コノハ？」

俺が尋ねると、コノハは狐耳きつねみみをびよこんと動かし、セイラをそつと見遣る。

「もしかしたら、シグ殿はひっくり返っているかもしれないでありますなあ」

……なるほど、なんとなく想像がついた。大方、セイラがシグとの特訓で特別張り切ったのだらう。セイラとドドリーの二人はいつもナチュラルにスパルタだからな……

「じ、人命救助してくるよ……」

半分冗談のつもりだったが、男湯に入ると、シグが死んだ虫のように仰向けで身体を痙攣けいれんさせて床に転がっていた。

「まさか本当にひっくり返っているとは……」

俺たちに気が付いたシグが目線だけ動かす。顔すら満足に動かせないって、一体どんな修行をさせられたんだろう……

「シグ、大丈夫か？」

「……ロア」

「なんだ？」

シグは露天風呂の床に転がり、夕空を見つめて呟く。

「セイラは人間じゃないのか？」

「に、人間だと思うけど……」

「そうか」

なんだろう、シグの一言にすぐたくさんさんの感情が詰まっている気がする。

いや、本当にどんな修行したんだよ！

シグを介抱かいほうしつつ、俺は温泉に身体を沈める。全身がじんじんと痺れしび、一日の疲れが抜けていくようだ。

石造りの温泉の縁ふちに頭を乗せ、天を仰ぐ。なぜかって？ 謎にこの場でスクワットを始める筋肉エルフを視界に入れたくないからさ。

リュグ爺、シグと三人で並んで声にならない心地よさを味わっていると、ふよふよと俺のもとへニルがお湯の中を漂ってくる。表情は分からないが、ニルも気持ちよさそうだ。

「この温泉、聖域の泉の水が入ってるんだけど、ニルは大丈夫なのか？ 普通、魔物は泉の水を嫌がるんだけど」

すると、ニルがにゅつと触手を伸ばす。俺に何か言いたげだが、もちろん俺には魔物の意思をくみ取る力はない。だから、ここは魔物の思考が分かるシグに通訳をしてもらう。

「快適、だそうだ」

「マジかよ。なんで問題ないんだ……」

すると、ニルは触手を伸ばし、そこから淡い光を放つ水滴をぼとりと温泉に落とす。

「泉の水を取り込んだ際に適応した、らしい？」

これには通訳のシグも首を傾げていた。

「意味が分からん……けど、なぜか納得してしまう自分がいるんだよね……」

だって、ニルだしな。この程度じゃ、今さら俺も驚きやしないさ。

温泉が出る頃には、外はすっかり暗がりに包まれていた。夜の帳の降りた聖域はいつ見ても神秘的だ。家屋から浮かぶ柔らかな灯りと、淡い光を放つ聖域の泉。真つ暗なキャンパスに宝石をちりばめたような満天の星。

眠ることを知らない大きな街では味わえなかった感動が、ここにはある。

もちろんそれは、聖域を出なければの話だが。

この聖域から一步外に出れば、そこはS級冒険者かそれに準ずる強さの持ち主でないと対処が難しい魔物がうようよしている、魔素にまみれた漆黒の森なのだ。

俺は夕飯の後にニルを魔素の森へと送り届けるのが日課だ。ニルは日中、毎日のように聖域へと顔を見せるようになったが、いつも夜には魔素の森へと帰っていく。聖域に棲み処をつくってあげようとしても断られてしまった。

シグの通訳によれば、やはり眠る時は魔素が多い場所の方が落ち着くらしい。ゴンザレスも時折、聖域の外で夜を過ごすことがあるし、やはり魔物にとって、魔素が一切ない聖域の存在は異質なの

だろう。

真つ暗な森を魔道具のランプで照らしながら進む。魔素の森には夜間に活発化する魔物も多い。本来であれば、煌々と輝く灯りは、そういった魔物にとって格好の的だ。しかし、この魔道具は、サナが聖域の泉を吸収した魔石でつくってくれた特注品。魔物除けにはうってつけだ。

「ニルもすっかり聖域のメンバーの一員だな」

抱えたニルが触手を伸ばして身振りする。最近、シグの通訳がなくなるとも、なんとなくだがニルと意思が通じ合う気がするのだ。スライムだから表情もないというのに、不思議な話だ。

「しかし、ゴンザレスもだけど、ついには『使役』していない魔物まで仲間になるとは……」

魔物は『使役』という、魔物と契約を交わす魔法を用いなければ、一部を除いて基本的には人類と敵になる存在のはずなのに。

「他にもお貴族様にエルフ、それから元英雄まで。ウチの住人って、はちゃめちゃな奴しかいないか？」

それに付け足すのであれば、その全員がとんでもない実力の持ち主ってことだ。

一人でスローライフを志していたあの頃に、こんなメンバーが揃うなんて想像できたのだろうか。ニルをぼんぼんと撫でると、ひんやりとした身体が不思議そうに傾く。きっと、人間で言うところの首を傾げているみたいな感じなのだろう。

「まっ、流石に魔物よりも特異な奴が聖域に住み付くことはないだろ。良かったな、ニル。お前を

超える驚きはもうないはずだよ」

その時、ふと胸騒ぎがした。危険というより、これは聖域に住み出してから何度も感じた、そわそわとした虫の知らせのようなものだ。

初めて感じたのは、ユズリアと一緒に住むと言い出した時のこと。次に感じたのはセイラとドドリがやって来る前。その次はサナがやって来る前。それから幾度となく味わった、外れない直感だ。

いやあ、久しぶりだなあ。

「本当、久しぶりいなあ？」

あれ？ 俺ってニルを送り届けているだけだよな？ どうして今、こんな胸騒ぎが……

その時、ニルが突然俺の胸から跳び下りた。ぴょんぴょんと近くの茂みを目指して跳ねていくニルを、俺は慌てて追いかける。

「お、おいニル？ どこに行くんだ？」

こっちはニルの棲み処の方向じゃない。それでも、ニルはどこかを目指すように迷いなく茂みを突き進む。

しばらくニルの背中を追いかけると、俺の気配察知に何かが引っかかった。同時に前方から衝撃音が響く。

「これは……ニル、止まれ！」

そこで感じたのは胸にへばりつくような重苦しい魔力だった。俺はこの魔力の正体を知っている。だから、俺の制止を聞かないニルに『固定』を使って動きを止めさせた。

ただ二つのものをくっ付けるだけの俺の固有魔法だが、規格外の強さを持つニルでさえ、『固定』からは逃れられない。

「ニル、分かるだろ？ ——これは魔族の魔力だ……」

冷や汗が止まらない。まさか、また魔族が聖域を襲いに来たのだろうか。そんな不安と焦りに思考が乱れる。

ニルさえいれば、どうにかなるか……？ いや、それよりも一刻も早く聖域の皆に知らせに戻るべきか……？

今、俺たちのいる場所は聖域からかなり離れた場所だ。しかし、どうしてか魔族とおぼしき存在の魔力は、俺が何度か相対した魔族のものよりも随分と小さい。

弱っているという認識でいいのだろうか。だとしても、ニルと俺だけでは危険すぎる。考えの固まったところで大人しくなったニルの『固定』を解く。

「一旦、皆のところに帰ろう」

しかし、ニルはその場を動かなかった。それどころか、触手で俺の服を掴み、強引に魔力のもとへ連れて行こうと引っ張る。

ニルは賢い奴だ。魔族の脅威も、俺が引き返そうと言っている意味も理解しているはず。それな

のに、ここまで強情に魔力のもとへ向かおうとするなんて。

「何か理由でもあるのか？」

もしかしたら、ニルは俺には分からない何かを察しているのかもしれない。魔物としての嗅覚か、それとも特異な個体ゆえの何かだろうか。

なんにせよ、このままでは埒が明かない。

一つ大きく息を吐き、俺は腹をくくことにした。ランプの灯りをそっと消す。

「やばそうなら、即撤退だからな」

ニルはうなずくように身体を上下し、魔力のもとへと勢いよく跳ね出す。その後を追いながら、魔族と思しき魔力に近づくにつれ、疑問が深まっていく。

やっぱり、過去に二度魔族と対峙した時に比べて、感じる魔力が小さい。

俺はこの違和感に少し覚えがある。駆け出したったユーニャに気配——つまり身体から発される魔力を隠す特訓をしていた時のことだ。魔物も人間も、視認できない相手の居場所を探る時は、対象が無意識に発している魔力を手掛かりとする。だから、冒険者には魔物に先手を取られないための気配殺しの会得が必須だ。

しかし、今感じている魔力の弱さの違和感は弱まっているというより、あの頃の未熟だったユーニャと同じく、魔力を隠そうとしているが、それが完璧にできずに魔力が漏れ出してしまっているようなイメージに近い。

しかし、あの魔族が魔力を隠すだろうか。少なくとも、俺の記憶の中の魔族は傲慢で力をとにかく振りかざす、そんな存在だ。

「はあ……本当、色々なことが起きる場所だな、この森は」

魔素で黒々と染まった大樹の前で、ニルが突然立ち止まった。触手を大樹に向けて伸ばし、俺に合図する。

俺の気配察知も当然、この大木の裏手に反応を示していた。俺も気配を殺してはいるが、流石にこの距離だ。相手も気が付いているはず。それなのに、攻撃を仕掛けてくるわけでも、逃げるわけでもなかった。

まさか、気配察知をしていない……？ いや、相手は人間ではなく魔族。気配察知のやり方を知らないなんてことがあり得るのか？

前を行こうとするニルを後ろに下げ、俺は慎重に大樹の裏に回り込む。

そして、大木の根本に座り込む存在を目にした瞬間、心臓が強く脈を打った。暗がりでも分かる灰紫色の肌と、蝙蝠のような薄く、黒い二枚の翼。額に生える二本の黒い角。間違いない、やはり魔族だ。黒い強膜の真つ赤な瞳が、俺を見て僅かに見開かれる。

俺は瞬間的にポーチから聖の魔石を取り出し、叩き割る。閃光に包まれる中、足元のニルをわし掴みにして、飛び退いた。そして、すぐさま『再生』を展開する。光の波動が球体状に広がり、俺とニルを包み込んだ。

『再生』は俺が敵と認識した対象からの攻撃を全て受け止めて弾き返す、俺の新しい固有魔法だ。しかし、魔族に『再生』が効くかは分からない。こんなことなら、ニルの変身する魔族を相手に試しておくべきだった。

光の波動が闇夜を照らし、魔族の姿を鮮明に浮かび上がらせる。

「こ、子供……？」

そこにいたのは、真っ黒な髪 of 小さな魔族の少女だった。その魔族の少女は怯えたような瞳で俺を見つめ、身体をすばませてその場から動こうとしなかった。殺気も一切感じ取れない。

瞬間的な静寂に、俺は酷く戸惑った。それでも、俺の身体は長年の染みついた動きを半自動的に為す。立てた二本指を振り下ろし、魔族の手と地面の枯草を『固定』。魔族の着ている布切れと大樹を『固定』。魔族固有の魔法を無効化するもやを出されない限り、これでこの少女はその場から動くことはできない。

ここまでして、ようやく俺は自らがずっと息を止めていたことに気が付いた。魔族と接敵するのは三度目だが、やはり何度相対しても慣れることはない。それだけ、元S級冒険者でも脅威を感じざるを得ない存在だ。

しかし、この後のことを考える間もなく、俺は間拔けな声を上げるようになった。

「えっ……？」

魔族の少女は『固定』によって動かない手と離れない背中に気が付き、なぜか安心したように



顔を綻^{ほころ}ばせた。そして、再び俺に目を向け、うつすらと涙を浮かべた後、ふっと意識を失ってしまった。

うるさいほど鳴り響いていた胸の鼓動^{こどう}が、徐々に唸^{うな}りを収めていく。

「ど、どういことだ……？」

ニルが触手を長く伸ばし、魔族の少女の腕をつんつんと優しく突^つく。少女が起きないことを確認すると、ニルは少女に近づいて顔を覗き込む仕草をする。

そんなニルを呆然と眺め、俺はまた違うことに頭を悩ませることになった。

危険度S級の魔素の森で無防備に意識を失った魔族の少女がここにいる。そして、俺の『再生^{リデイング}』の光で近くの魔物が寄ってきている気配がする。

つまり、このままこの少女を放っておいたら、無防備な状態で魔物たちに襲われるに違いない。

「子供とはいえ、魔族なんだよなあ」

と、あまり考えている時間はなさそうだ。

「ニル、この子を助けるべきだと思う？」

俺を見上げるスライムに聞いてみるが、なんの反応もしてくれなかった。全く、こんな時ばかり俺に判断を委^{ゆた}ねられても困るんだよな。

とはいえ、俺の一存で決めることはできない。なんせ、魔族だ。俺たちが苦しめられてきたことを思えば、子供だからという理由だけで助けるわけにはいかない。

「ニル、リユグ爺を呼んできてくれ。できれば、ドドリーとセイラも頼む」

俺はニルに伝言を任せ、聖域から応援を呼んできてもらうことにした。聖域にいるシグを介してならば、言葉を話せないニルでも用件は伝わる。

ニルは獣型の魔物を分身体で生み出し、足早に聖域へと向かった。

一人で魔族を見張るのは恐ろしいが、今のところ少女は目を覚ます気配がない。早急に応援が来てくれれば、どうにかなるだろう。

しばらくして、ニルがリユグ爺とドドリー、セイラを引き連れて戻ってきた。

三人は魔族の少女を見て、吃驚^{きつきょう}するわけでもなく、どうしてかため息を零した。

「お主、また厄介なことに巻き込まれているのね」

リユグ爺が不憫^{ふびん}な者でも眺めるような目で俺を見遣る。

「最初に魔族の気配を感知したのはニルだからな……？」

今回ばかりは俺のせいじゃない。ニルのせいってこともないが、魔素の森に魔族が再び現れるなんて、聖域全員の問題だ。

「それで、どう思う？」

随分と抽象的な物言いだが、どうやら俺の言わんとしていることは三人に伝わったらしい。そして、三人とも難しそうに唸る。

「兄弟はこの魔族を助けるか悩んでいると言いたいのだろう？」

ドドリーは困ったように頭を掻く。

「まあ、見た目が子供だし、俺とニルを見ても攻撃してこなかったのが、どうも引つかかるんだよな」

セイラがかがみ込み、恐る恐る魔族の少女を触診する。

「軽い擦り傷などはありませんが、大きな怪我はしていませんそうですね。疲労で倒れたといったところでしょうか」

「ふむ、見たところ、魔力も通常の魔族よりもずっと劣っているように思えるの。気を失っているなら、魔力の隠れいもできんじやろうし。今の儼らであれば、負けようがなからう」

リュグ爺がそう言うのだ。やはり、通常の魔族ほどの脅威を感じないという、俺の感覚は間違っていないかったようだ。

三人とニルが俺を見つめ、沈黙している。どうやら、俺の結論を待っているらしい。

結局、最後に決めるのは俺なのか。

「はあ……仕方ない、聖域に連れて帰るか」

やはり、俺のスローライフは長続きしない。

また厄介なことが起こりそうだなと独り言ち、俺は魔族の少女にかけた『固定』を解くのであった。

ニルを送り届けに行つたはずが、なぜか魔族を連れて帰ってきた俺に、案の定ユズリアはため息を零した。

「ねえ、ロアって本当にスローライフ？ とやらをする気はあるの？」

「俺のせいじゃないだろ……仕方ないじゃん、目の前で倒れたんだから……」

「じゃあ、陽光神様に何か罰当たりなことでもしたのかしら」

「勤勉に生きてきた人生のはずです……」

しかし、ユズリアの言うことももつともだ。これだけ次から次へと問題ごとが降りかかってくる、俺って過去に陽光神様に悪いことでもしたんじゃないかと疑ってしまう。

あの……陽光神様、見ているのであれば、そろそろ俺にスローライフをさせてください……モウユルシテ。

「それにしても、魔族の子供など聞いたこともないの」

ベッドに横たわる魔族の少女を見据え、リュグ爺が小さく唸る。

リュグ爺とセイラには念の為、魔族の少女が目覚ますまで俺の家で待機してもらうことにした。ドドリーとニルには他の皆と一緒にいて、何かあった時のために彼らを護ってもらうことになっている。

魔族の脅威はこの聖域にいる全員が重々承知だ。ここまでしてもなお、気が抜ける状態ではない。「そもそも、魔族って肉体的成長の概念があったんですね」

「セイラの言う通り、俺も魔族って人間で言うところの成人の見た目で生まれてくるものだと思うってたが、違うんだな」

過去に魔素の森の奥で見つけた、繭まゆから出てきたであろう魔族は、幼体ようたいと成体せいだいという概念はあれど、見た目に差はなかった。

「そもそも、魔族の出没自体が極稀ごくまれだからのお。儂らが知らぬことも沢山あるというわけじゃな。もしかしたら、この魔族の子供は特異な個体という線もある。まあ、考えたところで事実は変わらんわけじゃ」

「とにかく、今はこの少女が起きるのを待つしかないってことか。三人とも、俺のわがままに付き合ってくれてありがとうな」

すると、三人は一樣に呆れたような笑みを浮かべた。ややあつて、ユズリアがぷくーつと頬を膨らませ、俺の背中を軽く叩く。

「だから、いつも言ってるでしょ？ どんどん私たちのことを頼ってほしいって」

「まあまあ、こうして私たちに素直すなおに打ち明けてくれるようになっただけ、ロアさんも成長していますよ」

「そうじゃのお。つい最近までであれば、お主は一人で抱え込んだだろうな。うむうむ、孫の成長を見守れるのはいいものじゃ」

なんだか、セイラもリュグ爺も我が子を見るような眼差まなざししなただけ……

「俺は子供じゃないんだが？ もう酒も呑める歳なんだが？」

「何を言えるか、儂から見ればここにいる全員、まだまだひよっこじゃのお」

なんてことのない話に花を咲かせながら、魔族の少女が目覚めるのを待ったが、結局、その晩に彼女が目覚めることはなかった。

次の日になった。

俺とリュグ爺、セイラとユズリアに分かれて交替で見張りをしたため、朝から欠伸あくびが零れる。最近ほめつきり危険地帯で夜を明かすことがなくなったせいか、身体からだの鈍りだるさを痛感してしまう。

それなのに降り注ぐトラブルで戦うことになる相手は、災厄さいやくの存在である魔族や新種の龍、一匹で聖域の全員と渡り合えてしまうスライムと、冒険者時代では経験してこなかった強者ばかり。本当、おかしな話だ。

それでも、ここに住み着いて間もない頃に何度も考えた、他の場所への移住も、今では少しも過らない。どんなことがあつても、俺のいるべき、帰るべき場所は皆のいるこの聖域になつていっているというわけだ。

だからこそ、魔族の少女が起きた後のことを考えないといけない。俺が彼女を聖域に連れてきてしまった以上、彼女が聖域に仇あだをなすのであれば、毅然きぜんとした決断けつだんを下す必要がある。

「今から胃の痛い話だな……」

ぼやく俺に、隣でゴンザレスの身体をブラシでゴシゴシと洗っていたコノハが首を傾げる。そういえば、コノハと出会ったのも同じような状況だったか。魔族の少女とコノハは背丈も似たようなものだし、コノハを助けた時の状況を想起してしまったのかもしれない。

そして魔族の少女が目覚めたのは、太陽が高く昇ってからだった。

「んう……」

魔族の少女が発した小さな声音に、部屋にいた俺とリュグ爺が同時に指を動かした。俺は『固定』を、リュグ爺は『時空剣』をいつでも発動できるように。

時空の狭間から様々な剣を取り出し、自らもその時空を伝って移動できる『時空剣』であれば、もし魔族が敵意を見せてきても即座に対応できるだろう。

俺は身体の後ろで、細い透明な糸を魔族の少女にバレないように引つ張る。事前にシグに張ってもらった外への連絡用の糸だ。これで、外の皆へ警戒を促すことができた。

さあ、鬼が出るか蛇が出るか。そんなことを心の中で唱え、魔族の少女の動きを見守る。

魔族の少女は目をこすりながら、ゆっくりと身体を起こした。そして、辺りをきよるきよると見渡し、俺とリュグ爺を視界に収めた瞬間、びくりと身体を震わせる。少女の瞳が揺らぎ、僅かに開いた口がぱくぱくと動く。

「……あの」

ややあって、魔族の少女は声を発した。それでも、俺とリュグ爺はその場を動かなかった。

「こんな対応ですまないな。まず聞かせてほしいことがある。きみは敵か……そうじゃないか」

口の中が妙に渴く。まさか自分の家で、こんなにも緊迫感に包まれることになるとは。

「私は……」

魔族の少女は何か戸惑っているようだった。言葉を詰まらせ、そのまま黙り込んでしまう。

「……きみはどう見ても魔族だ。そして、俺たちは人間。これがどういうことを意味するか、分かってくれるかな？」

「えっと……」

随分と調子が狂う。これではこちらも対応のしようがない。

魔族の少女が弱い生物を演じているようには思えない。それでも、魔族は狡猾な生き物として俺の記憶に残っている。だから、動こうにも動けなかった。これが魔族の畏であれば、近づいた瞬間に不意打ちを食らうことになるかもしれないからだ。

「頼む。質問に答えてくれ。きみは俺たちの敵なのか？」

魔族の少女は俺をじつと見つめ、小さく息を呑んだ。

「ち、違うと思います」

「本当だな？」

「あの、私は——」

刹那、リュグ爺からとてつもない魔力が発される。息が詰まるほどの濃密な殺意の塊に、俺は思

わず魔族の少女からリユグ爺へと視線を移す。

リユグ爺は表情一つ変えていなかった。温和な面持ちで魔族の少女を見遣っていた。

俺が言葉を失っている、ややあつてリユグ爺が殺気を解く。

「ふむ、どうやら本当に僕たちの敵ではなさそうじゃな」

「リユグ爺、それってどういう……」

「彼女は僕の本気の殺気に微動だにしなかった。見ず知らずの者にこんなことをされれば、魔力を感じ取れるものは自然と臨戦態勢を取ってしまうじやろうなあ。そうであろう？」

「つまり、この少女は気配察知ができないと？」

「そういうことじゃな」

魔族の少女は依然として不安そうな面持ちで、俺たちを交互に見比べていた。確かにリユグ爺の本気の殺気を間近で浴びてなお、この様子であれば、演技をしているというわけではなさそうだ。

俺はもう一度、背後で先ほどとは別の糸を引っ張る。問題がないことを伝える連絡用だ。それを合図に、外で待機していた皆が窓越しに姿を見せた。

突然現れた大勢に魔族の少女は驚いたのか、ベッドの上で小さく縮こまる。こうして見ると、本当にただの子供だ。

リユグ爺が微かに浮かせていた手を膝の上に乗せるのを見て、俺も立てた二本指を解く。

「あ……えっと、名前はあるか？」

俺の問いかけに、魔族の少女はおずおずと答えた。

「ク、クトウリ……だと思えます」

「だと思えます？」

「は、はい……多分、そうだと思います」

先ほど質問した時もそうだったが、クトウリと名乗るこの少女はなんとも歯切れの悪い返答しかない。何か、理由がありそうだが……

「クトウリはどうしてあの森にいたんだ？ 他に仲間はいたりする？」

クトウリは小さく首を横に振る。クトウリが嘘を吐いていないのであれば、とりあえず他の魔族が周囲にいる心配はなさそうだ。

「気が付いたら暗い森の中で。怖くなっちゃって、それで……」

言葉を詰まらせたクトウリに、俺は仕方なく質問を変える。

「あの森に来てしまった前はどこにいた？ どんな生き物がいたとか、何か覚えている建物があったら、なんでもいいから教えてほしい」

「……ごめんなさい、私ちよつと前までの記憶が、名前以外ほとんど思い出せません。怖い人に追いかけて逃げてきたことだけ覚えてます……でも、どうして追いかけていたのか、思い出せなくて」

「怖い人？ もしかして、クトウリは人類圏からここまで来たのか!?」

クトウリは曖昧にうなづく。

だとすれば、今頃人類圏ではとてもない騒ぎになっているんじゃないだろうか。以前、魔素の森に出没した魔族の存在は俺たちしか知らない。だから、俺たち以外の全ての人々の中で、魔族が最後に発見されたのは、リユグ爺たち英雄が倒した五十年前という認識だ。再び魔族が出没したとなれば、人類圏では大規模な捜索が行われていてもおかしくはない。

しかし、ここに来てまたしてもあまり良くない事実が発覚してしまった。

「記憶喪失かのお。一時的なものだといんじゃないかな」

リユグ爺が俺の胸の内を代弁した。過度なストレスにおける一時的な記憶の喪失や混濁は、過酷な環境に身を置く冒険者でも珍しくはない。クトウリも随分と怖い思いをしたようだし、それが原因なのだろう。その内、記憶が戻ればいいのだが。

「あの……」

ほんの少し生まれた静寂の合間に、クトウリが震えながら小さく手を挙げる。

「私はど、どうなるんでしょうか……」

俺は顔に出すことなく心の中でため息を零す。

さて、どうしたものか。

クトウリは紛れもない魔族だ。しかし、リユグ爺の見立てであれば、実力は従来の魔族に大きく劣る。

それにクトウリはまだ幼い子供。人間的な年齢で言えば七歳かそこいらだろう。そんな子を魔族だからと一方的に追放することは、俺には容易じゃない。

俺はリユグ爺に目配せをする。リユグ爺は眉一つ動かさなかったが、お主の好きにしろと言われているみたいだった。

後頭部をガリガリと乱暴に搔く。

「助けたのは俺だしな……」

不安げなクトウリに、俺は相好を崩した。

「お腹空いたろ？ 飯にしようぜ」

「うむ、そうじゃな」

俺とリユグ爺は同時に立ち上がる。俺の様子を見て目を丸くするクトウリに、俺は手を差し出す。

「ほら、早く行くぞ。皆にも紹介しないと」

宙を彷徨う少女の小さな手を、俺は迎え握る。

やれやれ、スローライフは一旦お預けかな。

第二章 聖域の新しい仲間たち!?

クトウリ自身の言う通り、彼女は直近の記憶以外はほとんどないようだ。自らの名前は分かるが、名付けてくれた相手は覚えておらず、そもそもどこで生まれて、なぜ人類圏に紛れ込んでしまったのかも思い出せないらしい。

怖い人とやらに追いかけられ、とにかくがむしやらに逃げ延びた結果、魔素の森の奥深くへと迷い込んでしまったとのことだ。

「しかし、クトウリが魔物に襲われなかったのは意外だな」

シグが糸を操るのをまじまじと見入るクトウリをぼんやり眺め、俺は独り言のように呟く。

クトウリを聖域で保護すること三日。魔族だからと皆は受け入れないかと思われたが、意外にもクトウリはすんなりと聖域の生活に馴染んでいた。誰もクトウリを異分子扱いすることなく、シグのように、クトウリが間近にいようともしつても通りの生活を送っている。

やはり、聖域で群を抜いて強いリュグ爺が、従来の魔族ほどの危険はないと断言したことが大きいのだろう。

でも、それだけじゃない。クトウリが馴染めたのはきつと、彼女の話し方や所作、振る舞いが妙

に人間らしいおかげかもしれない。他人を蔑んだりしないし、暴れることもない。こちらへの配慮も窺える。クトウリはとても賢い子なのだろう。

「クトウリ殿が無意識に放っている魔力は随分と禍々しいので、魔物も彼女を襲うことは憚られたのでありますかね」

なるほど、コノハの考察は的を射ている気がする。クトウリは魔力を制御する方法を知らないらしく、こうして普通に生活している現在も、彼女からは重苦しい魔力が漏れ出していた。早いところ魔力を操る術を教えた方が良さそうだな。

それに加え、聖域の泉も十分に注意させないといけない。幸いにも、泉でつくった聖の魔石を叩き割った際に生じる閃光ではクトウリに害が及ばないことは実証済みなので、足を滑らせて泉に落ちない限りは大丈夫そうだが。

「シグ、あとどれくらいかかりそうだな？」

「ちょうど終わった」

そう言い、シグは自らの魔法で生み出した糸で編んだ、白いワンピースを掲げて見せた。クトウリはそれを見上げ、目を輝かせて拍手をする。

「クトウリの着ているものはポロポロの布切れだったからな。可哀想だったし、シグがいてくれて助かったよ」

まさか、魔族を人類圏まで連れていって服を見繕うわけにもいかないし、本当にシグが器用だよ

かった。にしても、シグの手作りの服はやけに可愛らしく、クトウリくらいの少女が着るのに最適
なデザインだ。一見、服に興味などなさそうなシグだが、才能とは恐ろしい。日夜、女性陣がシグ
に服をつくってくれるように頼み込むわけだ。

「クトウリ、着替えておいで」

俺の呼びかけにクトウリはうなずき、シグからワンピースを受け取った。クトウリはシグに何度
も頭を下げ、そそくさと家の中へ走っていく。

「某が手伝ってきまする」
それがし

「ああ、頼むよ」

俺が着替えを手伝うわけにもいくまい。クトウリのはコノハに任せ、俺はちょうど魔素の森
から戻ってきたセイラとドドリーを手招く。

「どうだった、二人とも？」

二人に調査の結果を尋ねる。ドドリーとセイラ、それからリュグ爺には近辺の警戒を頼んでいた。
年上組だけでひっそり行っているが、これも生活を護るために重要なことだ。

事の善悪は置いておき、聖域の近くでまた魔族が発見された。その魔族というのがクトウリだけ
とは限らない。

前回の魔族の襲来だって姉弟らしき二人組だった。

もしかしたら、クトウリの仲間や育ての親なんかが近くに潜んでいるかもしれない。そして、そ

いつがクトウリのように、俺たちに仇をなさない存在とも限らない。

だからこそ、今は十分に警戒しておく必要があった。

「ロアさんがクトウリさんを見つけた場所まで範囲を広げて調べましたが、これといった違和感
なかったですね。魔素の森の生態系もいつも通りでした。リュグ爺様はもう少しお一人で探って
みるということです」

セイラが細かく調査結果を教えてください。

「うむ、植生も特に変わったことはない。過去に魔族が現れた時は、直前に魔物も植物もいつもと
違った雰囲気を感じていたからな」

ドドリーの話も聞く限り、今のところは過度な心配は必要なさそうか。

「分かった。二人とも、すまないが念のため、もう少しだけ警戒をしておいてくれるか？」

すると、二人はやけに意味深な笑みで揚々とうなずく。きっと、ようやく頼る気になってくれた
とか思っているのだろう。

そりゃ、頼るさ。俺は聖域の皆には全幅の信頼を置いているんだ。

今の俺の役目はクトウリから目を離さないこと。その役目すらシグやコノハにも手伝ってもら
し、他のこともなるべく一人で抱え込まずに皆に頼むようにしている。

まっ、つまり俺も変わってきたってことだ。

「ロア殿ー、クトウリ殿の着替えが終わったでありますよー」

コノハの後ろに隠れ、クトウリが恥ずかしそうに顔を覗かせる。シグの見立て通り、やつぱりクトウリに純白の服は良く似合う。こうして見ると、魔族だつてことを忘れてしまいうさだ。

「うん。可愛い、可愛い。髪もコノハがいい具合に整えてくれたし、とりあえずこれで身なりは問題ないかな」

その後、コノハとシグの二人とは別れ、俺はクトウリと畑の様子を見に行くことにした。

ついこの間、ニルからもらった種を植えたばかりだが、泉の水を吸い込んだ魔石のおかげで、既に一面を埋め尽くす作物が実っていた。

どうやらニルがくれた種は珍しい野菜の種だったようだ。

太陽の光を蓄えたような鮮やかな黄色の細長い作物を、一つ鉢で収穫する。ウリのようなそれをパキッと割ってみると、瑞々しい断面が露わになった。

半分をクトウリに渡し、俺はもう片方をひとかじり。しゃくしゃくとした食感だが、さっぱりとした甘美な味が口の中を広がる。見た目は野菜だが、味は果物のようだ。

初めて食べた作物に舌鼓を打つ俺を、クトウリがじっと見つめていた。

「どうした？ 食べてみるよ、案外イケるぞ？」

「あ……い、いただきます……」

俺に促され、クトウリも小さな口で作物をかじる。その瞬間、ぱつと明るくなるクトウリの表情に、俺は思わず小さく笑みを零した。そんな俺に、クトウリは少し頬を赤らめて背を向けてしまう。

恥ずかしがり屋なクトウリが、完全に気を許してくれるのはまだ先になりそうだな。

「さて、食べ終わったら収穫作業だ。今日中に全部終わらせるぞ。クトウリも手伝ってくれるか？」するとクトウリはこくこくとうなずき、手元の作物を口に押し込む。

「急いで食べなくてもいいんだぞ？」

「で、でも、私もお役に立たないと」

そんなことを言い出したので、俺はクトウリの頭をぼんぼんと撫でる。子供は子供らしく、俺たちに迷惑をかけるくらいでちょうどいい。いい子過ぎては、逆にこちらが困ってしまうというものだ。

「いいか、クトウリ。ここで生活するうえで、最も大切なことを今から教えるぞ？」

「は、はい……！」

「本当に、ほんつつつとうに大事なことだ」

クトウリはごくりと喉を鳴らす。それでいい。しっかりとクトウリには教育を施さないと。

俺はクトウリと同じ目線に立ち、彼女の肩を掴む。

「健康で、文化的で、とにかく平穏な生活することだ」

クトウリがぼかんと口を半開きにしたまま固まってしまった。しかし、すぐにきゅつと口を結び、力強くうなずく。

きつと賢いクトウリは、俺の言っていることが日常におけるごく当たり前のことだと気が付いた。

だが、俺の真剣な眼差しに、何か重要な意味があることを悟ったのだろう。

「いいか？ 一日三食、おやつは絶対摂取。昼寝は一日四時間以上。労働は一日三時間まで。働き過ぎは最大の禁忌だからな。それから助け合いも大事だ。俺はクトゥリが困っていたら絶対に助ける。その代わり、俺がサナやユズリアを前に正座をさせられていた時は、理由を聞かずに助けてくれ」

「わ、分かりました……！」

「よし、俺の背中を見てすくすく育て！ そして、共に最高のスローライフを謳歌しようではないか！」

ふっ、決まった。ありがとう、俺の演説を最後まで聞いてくれて。

「……お兄」

「ぎくっ」

いつの間にか俺たちの隣に忍び寄っていたサナが、呆れたようにため息を零す。

「驚きが声に出てる」

い、一体いつからそこに……

サナはクトゥリに向き直る。

「お兄が私に怒られている時は助けなくていい。大抵、お兄が原因だから」
なんて辛辣な。でも、否定できない自分が悔しい。

こうして、俺のスローライフ計画にクトゥリを巻き込むことは、一瞬で阻止されてしまった。

「わーはっはっは！ いくぞ、兄弟！」

ドドリーの陽気な笑い声と共に、数多の魔法でできた矢が空に射出される。魔法矢の群れは弧を描き、シグに向けて加速しながら降り注いだ。

シグは自らの糸を空中で操り、次々と魔法矢をからめ取っていく。シグが手をぐつと握った瞬間、魔法矢を捉えた糸が縮まり、鮮やかな光を放って魔法矢が爆散した。

賑やかだなあ、今日も。

俺はドドリーとシグを遠巻きに眺めながら、痺れた足を組みかえる。

「お兄、動かない」

「はい……」

正座した俺を冷徹な瞳で見下ろすサナに、俺はただ従うことしかできないでいた。

「ミステリア、お主もじゃ」

「はいいいっ！」

隣で同じように地面に座らされていたミステリアの背が、リュグ爺の一喝によってぴんつと伸びる。

やれやれ、どっかで見た光景だな。

「おい、ミステイア」

サナとリュグ爺がよそ見した隙に、俺はミステイアへと小声で話しかける。

「何したんだよ、一体。俺まで巻き込まれてるじゃんか！」

「ここまでの道中でお師匠が罫を張っていたんだよ。私が臍^ふ抜けてないかのチェックだつてさ」

「それで、見事に臍^ふ抜けていたと？」

「一刻も早く、ユっちゃんに会いたかったんだから仕方ないんだよ。それより、どうしてきみまで妹ちゃんに怒られてるのさ」

「……今朝、洗濯物を出し忘れました」

ミステイアの顔が僅かに引き攣^{ひきつ}る。まさか、それっぽっちのことかで？　と言いたげな表情だ。

「ここは平和だね」

ややあって、ミステイアは半笑いで言った。

「……本当にそう見える？」

「きみ以外は」

うん、そうかも。

「というか、部外者の私はともかく、きみってこの村のリーダーだよな？　リーダーがこんな目に遭つてるのに誰も助けてくれないって、もしかして人望^{じんぼう}皆無^{かいむ}？」

そ、そうかも……

「……」

「……」

「……」

「……」

最近のユニヤもサナやユズリアに遠慮してか、こういう時に助けてくれなくなったわけだし。ただ、それもつい先日までの話。

「ふっふっふっ、今の俺には強力な味方がいるんだぜ」

俺はそわそわとこちらを窺^{のぞ}っていたクトウリを、手招きで呼び寄せる。

「ねえ、来た時からずつと気になっていたんだけど、もしかしてあの子、魔族？」

小走りで近寄ってくるクトウリを見据え、ミステイアが俺に尋ねる。

「色々あってな。最近、ここに住むようになった魔族の子だ」

「へえー」

ミステイアは魔族を見るのは初めてのはずだが、なんだか反応が薄いな。

「魔族だぞ？　怖くないのか？」

「うーん、お師匠の方が何倍も怖い」

……なるほど。確かに俺も今となっては魔族よりも妹の方が怖い。魔物の最上位種である龍を一人でフルボッコにする妹だぞ？　怖くないわけがない。

「ど、どうかしましたか？　あつ、は、初めまして……」

ミステイアに気が付いたクトウリは、礼儀正しく彼女へ向けて頭を下げる。

「隣のお姉さんはどうでもいいから、俺を助けてくれクトウリ」

「聞こえてるよ？」

ミステリアが何か言ったが、聞かなかったことにしよう。無視を決め込む俺に、ミステリアは口をとんがらせ、突然手を挙げた。

「おーい、妹ちゃん！ きみのお兄さんが何か企んでるよー！」

「あつ！ おい、ミステリア!？」

べーつと舌を出すミステリア。こ、こいつ……俺を売ろうとでも言うのか？

「お兄、クトウリを呼びつけて何してるの」

サナがにじり寄ってくる。すさまじい圧だが、サナも俺以外には優しい奴。くらえ、クトウリの母性くすぐる懇願をつ！

「クトウリ、頼む！」

「あ……えつと、ロアさんも反省しているみたいだし、そろそろ……」

たどたどしくも俺を助けてくれようとする上目遣いのクトウリに、サナは無表情のまま動きを固める。

や、やったか……!?

そう思ったのも束の間、サナがポケットから包みに入った飴玉を取り出す。それを見た瞬間、クトウリが無邪気に目を輝かせた。

「クトウリ、これあげるから大人しくしていて」

ぶんぶんと首を縦に振るクトウリ。

くそつ！ どうしてこんな時に、子供らしい可愛い一面がつ!?

せっかく助けに来てくれたクトウリが、サナに背を押され離れていく。

「い、行かないでくれ。クトウリ、俺を置いて行かないでくれえええ！」

まーずい、クトウリがいなくなってしまうえば、妹によるスプラッターが巻き起こる予感がある。伸ばした手が虚しくも地面へと落ちる。

「ねえ、馬鹿なことしてないで、早くお師匠の機嫌を取ってよ。この間、協定結んだじゃんか！」
うなだれる俺にミステリアが耳打ちをする。

「いや、無理だろ。さつきリユグ爺が馬鹿弟子を黒龍の巣穴に放り込むとか呟いてたぞ」

「お師匠とやり合うよりはましだけど、それでもそれってほぼ人殺しだよ！」

こしょこしょと言いかう俺たちの隣で、日向ぼっこをしていたゴンザレスが首を傾げる。その拍子に、ゴンザレスの頭の上に乗っかっていたニルが、ぼよんと俺たちの前に落下した。

なんとも平和な光景に、俺とミステリアは同時にため息を吐いた。

「なあ、今日はまたなんで聖域に来たんだよ。忙しいんじゃないのか？」

ミステリアは冒険者時代の俺のような、激務に苛まれるS級冒険者だ。いくら弟子のユズリアを可愛がっているからって、そう頻繁にこんな辺境まで遊びに来れるわけではない。

「忙しいから来たんだよ。また依頼を手伝ってほし——」

「嫌だ」

「早いっ！ 酷い！」

もちろん、手伝ってやるつもりは最初から毛頭ないのだが、今回ばかりはしっかりと断る理由がある。

「クトゥリを見てなくちゃならないんだよ。だから、俺は今この聖域を離れられないの。リュゲ爺に頼んでくれよ」

「お師匠にはもう別の依頼を頼んだんだよ」

「ミスティア、どんだけ依頼溜まってるんだよ……」

ミスティアが拠点としているロトウーラの街から魔素の森までは馬車で七日、ユズリアでさえ丸一日かかる。しかし、ミスティアの移動速度なら数時間で済むらしい。

自ら依頼を消化するよりも、俺たちに頼んだ方が早いだろう。

「しつかなないじゃん！ どくしてか？ 最近、近辺のS級冒険者がどんどん減ってるんだから。」

あゝあ、ユッチャンもお師匠もだけど、皆どこに行っちゃったのかなあ？ 中には自分から引退したなんていう奇特な人もいるらしいし？」

ミスティアはわざとらしく辺りをきよろきよろと見渡す。

「ぐっ……わ、悪かったよ」

確かに、ここには世界で約百人しかいないS級冒険者が六人。引退した俺も含めれば七人が住んでいる。しかも、S級冒険者の中でもトップクラスに有能な奴らばかりだ。

「でもな、今回ばかりは本当に俺は行けないぞ？」

「あの魔族の子だっけ？ それなら、彼女も連れて行けばいいよ。依頼先は危険度S級の氷山だから、人目はないしさ。それにきみたちからすれば、あまり危ない依頼ってわけでもないし」

そうは言っても、クトゥリは魔力の制御がまだ上手にできない。一応、魔法が使えることは確認済みだが、威力の調整もままならなかった。S級の依頼に連れて行くのは危険だ。

しかし、ミスティアへの罪悪感も確かにある。いや、皆が聖域に住み付いて、依頼をこなさなくなつたのは俺のせいではないんだけど！

まあ、俺も引退して、結果的に他のS級冒険者の負担を増やしてしまった一人だ。

「はあ……今回だけだからな？」

結局、またしても俺はミスティアの頼みを断ることができなかった。

ミスティアから任された依頼は、以前魔素の森から北西に三日かけて俺が辿り着いた月狐族の里を、さらに徒歩で数日進んだ先にある、氷山に棲み着いた魔物の討伐だ。

馬車を使うとそれなりに時間がかかる距離だが、俺たちにはゴンザレスがいるから、移動に日数を割くことはない。アクシデントでも起きない限り、数日で依頼をこなして戻ってこられるだろう。飛行が可能な魔物に変身できるニルは、リュゲ爺とユーニャの依頼の方に付いて行くらしいので、俺たちの依頼にはゴンザレスを頼らせてもらう。

ミスティアは別の依頼へ向けてすぐに出発した。俺たちがミスティアから頼まれた依頼は、ユズリア名義での受注になっているため、俺に同行するのはユズリア、ゴンザレスとそしてクトウリだ。サナも付いてくると息巻いていたが、ミスティアの方の依頼で強力な魔法使いが一名必要のことだったので、渋々ミスティアの方へ参加することになった。

他の面子には聖域の留守を頼み、さっそく依頼へと出発をすることにした。善は急げというか、急がされているというか。とにかく、面倒なことはさっさと終わらせて帰ってくるとしよう。

「ちよつと怖いですね」

俺の左腕にしがみついたクトウリは、ゴンザレスの背から地上を恐る恐る覗く。魔族は自前の翼で滑空が可能なはずだが、クトウリにはまだ難しいらしく、高いところに慣れていないようだ。

「……私も怖い」

ユズリアが俺の右腕をぎゅつと掴む。

「嘔吐け、いつもびゅんびゅん跳び回ってるだろ」

「こ、こんな高いところまでは私だって跳べないから」

実に白々しい。俺もユズリアとはそれなりに長いこと一緒にいるから、彼女の考えることは予想できるようにになった。大方、クトウリに嫉妬しているのだろう。こんな小さい子に対抗などしいでもらいたい。

それに全員、俺の『固定』を付与してあるのだから、万が一にもゴンザレスから落ちることはな

いというのに。

「どうだ？ 見覚えのある場所とかないか？」

クトウリに尋ねるが、彼女は小さく首を振る。

クトウリを同行させたのには、俺が見守るためという理由の他に、外の世界を見ることが記憶を戻すきっかけにならないかと考えたからだ。

「今のところ収穫はなしか」

「すみません……」

「謝る必要ないわよ。それに焦んなくてもいいじゃない。クトウリはもう私たちの仲間なんだし」
ユズリアが謝るクトウリをフォローする。

「あつ、でもロアはあげないわよ？」

「待て、俺はユズリアのものになったつもりはないんだが？」

「私の裸を見たのに？」

「おいしいっ！ クトウリの前で変なこと言うな！」

ああ……クトウリからの視線が痛い。驚きと羞恥が入り混じった表情で、俺とユズリアを見比べないでくれ。

ユズリアがなまじ嘔吐を吐いていないから、たちが悪い。ここにサナがいたら、俺は今すぐ『固定』を『解除』されて、ゴンザレスから突き落とされているだろう。

クトウリの誤解を解くため奔走^{ほんそう}しているうちに、月狐族の里を通過し、目的地に到着した。
吹雪^{ふぶき}が吹き荒ぶ^{あふ}、山脈^{さんみゃく}ごと氷漬けになったレギレス山が、今回の依頼の目的地だ。

暖かい季節でも、この山一帯だけは一年中地面に張った氷が溶けることはない。遥か昔、氷を司^{つかさど}る龍が棲んでいたやら、大魔法使いが命を賭^かして氷の魔法を使ったせいやら、はたまた、この氷山自体が、地下に埋まる巨大な魔物の一部が地上に突出したものだなどと、様々な議論がされているが、未だ真相は明らかになっていない。

こういった何が起るか予測不可能な地域や、危険な魔物が跋扈^{はつこ}する地帯が危険度S級に指定されている。

ゴンザレスを吹雪の範囲外に降り立たせ、俺たちは氷山に足を踏み入れる。ゴンザレスは近くで待機だ。

「さ、寒過ぎない？」

ユズリアが自らの両腕を抱きかかえてぶるぶると震える。寒いと言いながらも、機動力重視の戦闘スタイルのため、いつもの冒険者服にローブを一枚羽織るだけの軽装なのは、少し可哀想に思える。

一方、俺は俊敏性^{しゅんぴんせい}を必要としないため、完全防寒だ。しかし、それでもなお、肌を刺すような冷気を感じる。視界は吹雪で不明瞭だし、滑りやすい氷の地面は歩くだけで精神と体力を酷く消耗する。

そして、吹雪の中で姿は見えないながらも、強い魔力を放つ魔物の気配がそこら中からしていた。周囲の地域に棲息する魔物とは段違いの強さを感じるのは、この特殊な環境に適応するために進化したからなのだろう。

「俺の『固定』は冷気や熱気で肌が炎症を起こさないようにできても、温度自体は感じるからな。こればかりは仕方がない」

息をするのも苦痛な極寒の氷山だ。やはり、クトウリには厳しいかとも思えたが、意外にも俺やユズリアよりも寒がついていない。もしかしたら、魔族は環境への適応能力が著しく高いのかもしれない。

「それで、依頼の魔物はなんだつけ？ まあ、もう大体の位置は魔力で察しているけど」

見上げた山の中腹辺りから、周りの魔物とは一線を画す強大な魔力を感じる。それに、目視で見るくらい、魔力を感じる部分だけ、ぽっかりと不自然に吹雪が止んでいた。

俺の問いにユズリアが答える。

「極炎猿^{シムンドエナフ}ですって。あいつ、毎回相手にすると、熱気で肌が焼けるから嫌いなのよね」

極炎猿とは、体表に燃え尽きない炎を纏^{まと}った危険度S級指定の魔物だ。巨大な図体に似合わず、俊敏な動きで相手を翻弄し、周囲の気温を灼熱に上昇させて、じわじわと相手の動きを鈍らせる非常に面倒な魔物である。

「でも、極炎猿^{シムンドエナフ}って確か、元々それなりに気温が高い火山地帯なんかにしか棲息していないんじゃない